

光をあつめる

その時、カメラの向こう側にある世界から光が突然飛びこみ、そして、ピントグラスに満ちた。
それは、もはや（未だ）何もをも名指しえない、原初の光としか言いようのない光との遭遇であった。

私がある写真作品を通して作者に共感・共鳴する瞬間とは、画面から何かを乗り越えようとする気配や意志の風圧を感じた時と言って良いと思う。

それは、私の写真への興味が、第一義的に「知覚の拡大装置」としての機能であるからにほかならない。

視覚、嗅覚、触覚、味覚、聴覚の五感あるいは直感や第六感と呼ばれるものなど。人は様々な感覚を駆使して世界を知覚する。写真とは、人に備わったこれらの機能のうち、特に視覚を補助し、時には知覚機能だけでは到達できなかった経験をすらすら与えるものであると位置付けられる。

遠くへ、遠くへ、遠くへ。知覚の拡大装置としての写真は、私を際限のない旅に駆り立てる。

今一度視覚について考える。

私たちの視覚は、可視光もしくは可視光によって照らし出された物体をしか認識できない。つまり、私たちが視覚によって捕捉できる世界は、光がなければ何一つ成立しないという点において光によって支配された世界である。

視覚が光に支配されていることと同様、写真もまた、その構造上あきらかに光によって支配されている。写真は何よりもまず、光によって成立する。

油絵や彫刻、エッチングをはじめとする版画技術。写真に先行するメディアによる視覚情報の定着がどれも人の手による作業を基本とし、あくまでも人の手の延長線にあったのに対して、写真術は、カメラ・オブスクラの発明、レンズの発明、感光材料の発見など、自然現象の観察による科学技術の集大成として生み出された自動筆記術であり、それは、人の手を離れたところに属する人類史上初めての視覚メディアであったと言えよう。

ニエプスのヘリオグラフ(Heliograph)、タルボットのフォトジェニック・ドローイング(Photogenic Drawing)、フローレンス、ハーシェルのフォトグラフ(Photograph)。

この光による自動筆記という画期的な科学技術の発明者たちとその受容者たち。今からおよそ170年前の人々の、期待と希望（そして恐れと絶望）はいかばかりのものであっただろうか。

* * *

この「光をあつめる」という連作を生み出す契機となったのは、旅の途上、喜屋武から摩文仁に至る海岸でのできごとであった。

原初の光は私に語った。

「このお前を離れたところに位置する装置を使って、意識が事物に注意を向けるほんのわずか前、お前の眼が目の前の事物を知覚する一瞬前の世界を見てみたくなはないか？」

私の世界がわずかに広がったことを知ったのは、それからしばらく時を経たのちのことであった。